

心理臨床学における象徴の概念とその機能について

—象徴形成のプロセスに着目して—

大場 有希子

1. はじめに

心理療法において、象徴的な表現はクライアントを理解するため、またセラピストとクライアントの関係を築いていくために非常に重要なものとされている。交わされる言葉に限らず、心理療法の場で表される夢、イメージ、箱庭、遊び、描画などは、クライアントの内的世界を表す象徴的なものとして扱われ、それらを用いて表現したり、やりとりをしたりしていくことによって、クライアント自身の表現や理解が深まっていくのではないかと考えられる。しかし、その一方で、そもそもその象徴的な表現をすることが難しいクライアントも存在しており、そのような人々にとっては、象徴が心理療法の中で生じること自体が大きな意味を持っているといえよう。象徴形成は自然な発達の中で生じてくるものとされているが、かねてから精神分析や分析心理学をはじめとする心理臨床学の分野の中で着目されてきており、統合失調症のクライアントは象徴を扱うことが難しいということが論じられてきた (Klein, 1975/1983 ; Segal, 1991/1994)。さらに、現代に生じた診断である発達障害のクライアントもまた象徴形成に難しさが見られるということが、多くの事例や研究を通して述べられてきている (河合, 2010 ; 伊藤, 2001)。これらのことから、象徴形成は、診断も時代背景も異なる中でなお重要な機能としてあり続けているといえるのではないだろうか。統合失調症と発達障害とは異なるものではあるが、どちらに関しても象徴は統合的なまとまりを持った“主体”としての感覚を持つことと関連があるという可能性が考えられる。そこで、本論では今一度心理臨床学における象徴と象徴形成の発達についての理論を概観し、心理療法において象徴が成立するまでの象徴形成のプロセス、そしてそれを扱うことについて主体の生成という観点から考察したい。

2. 象徴とは何か

「象徴」の語源はギリシア語の Symbolon であり、これをさらに細かく見ていくと「sym—一緒に」と「bole 投げる・とばす」という部分に分かれる。Symbolon は「一緒にする」ということを意味し、もともと1つの物を2つに割って二者が別々に所持し、それをつぎ合わせることで真偽確認の証拠とする「割符」を意味するものであった。これらのことから、象徴の語源 Symbolon は異なる2つの物が一緒になっていることや、異なるものを一緒にする・つなげることといった意味が考えられる。

象徴については多くの哲学者により議論が行われてきた。そのうちの1つとして、Pierce, C.

S.の記号論を挙げる。Pierce は何かを示すものとして広く記号を捉え、記号論は記号、対象、解釈という三項関係によって成り立っているとされている。そして、この記号論では記号は3種類に分類される。第1に、肖像画や写真など、表すものと表されるものとの間には同様の特質を保持しているなどの類似点がある「類似体 likenesses」、第2に、温度計の示す温度や風向きと風見鶏など、表すものと表されるものとの間には物理的もしくは因果的な関係といった近接性を持つ「指標 indices」、第3に、言語や国旗など、表すものと表されるものとの間には類似や連関が無く、恣意的なつながりを持ち、そのつながりは慣習的に学ばれていく「象徴 symbols」である(Hartshorne & Weiss, 1978 ; 米盛, 1981)。Pierce は記号の1つとして象徴という言葉を用いているが、他の種類の記号と比較すると、表すものと表されるもののつながりは恣意的であることが強調されている。

心理臨床学における象徴とは、さまざまな定義や理論があるとは思われるが、心理臨床大辞典(2004)には、「無意識の心の動きや内容が投影された外界の事物」とある。つまり、情動をはじめとする個人の心的な内容を表す何らかの外界のものであるといえよう。そこに類似点が生じるか否かについては厳密には定義されていないのではないと思われるが、表される内界の何かと、表す外界の何かについては、客観的であれ主観的であれ、なんらかの類似性や近似性はあるのかもしれない。その一方で、言語も高度に象徴化されたものとされており、まったくの恣意的なつながりを持つものも含まれていると考えられる。

3. 精神分析（対象関係論）における象徴形成

精神分析において、象徴形成は治療の中で重要視されてきた。Freud の時代から精神分析はさまざまな方面に発展を遂げていくが、ここでは特に象徴について論じられてきたと考えられる対象関係論を中心に述べていく。

精神分析の創始者である Freud, S.は、症状や夢などの中に象徴作用を通じて無意識の幻想が表れるとし、比較的広い意味で象徴を捉えていたようである。しかし、のちに象徴を他の「間接表現」から区別されたものとするようになり、Freud における象徴は抑圧されたリビドー衝動を表すものであるとされ、異なる文化においては異なる点で異なることがあるが、太古の過去に由来するとした。また、象徴の解釈は分析家によってのみ為され、患者は象徴からは連想しないとした(Freud, 1900/1968)。また、Jones (1916)も象徴は「抑圧された欲望の表現」であり、「定常的意味を持っている」としており、昇華とは異なるものとして述べている。両者ともに内的なものを表すとされているが、その意味としては、基本的に抑圧された欲望や性的なものを表していたようであり、やや限定的なものであるともいえよう。

Klein, M.もまた、子どもの精神分析を通して象徴に関する問題に取り組んでいる。子どもの遊びは心的な世界や幻想の象徴的表現とし、分析の中でそのような表現をし、解釈を行っていくことが治療的に働くと考えた。また、象徴は昇華や空想の基礎であり、「個体の外界や現実一般との関係の基礎となる」としている(Klein, 1975/1983)。乳児の母親への攻撃性により母親を破壊してしまうことやその報復に対する不安から、対象である母親を他のものと同一化させる力を象徴の前駆段階としている。これは母親への攻撃性が外界との関わりへと広がっていく、つまり空想的な世界から現実としての外界との関係が確立される基礎と考えられる。このこと

から、不安は象徴形成のもととなるものであり、象徴形成により個人は外界へと開かれていくと考えられる。さらに Klein (1975/1983) は、自我発達の異常な制止がある子どもは攻撃性に対して特異な防衛が働くために象徴形成が阻害され、象徴形成が無ければ自我の発達は止まるとしており、象徴形成の自我発達における重要性を論じた。

Klein から発展させて象徴形成について考えたのは、弟子である Bion, W. と Segal, H. である。Bion (1977/2003) は、 α 機能というものを想定し、乳児は α 機能が未発達であり精神病患者の中では機能していないとした。 α 機能とは、「視覚、聴覚、嗅覚の感覚印象からなるアルファ要素を生産することで、情動的経験を理解可能で意味あるものにする」ものである (Symington & Symington, 1996/2003)。すなわち、経験から得られたものに意味を与え主体的体験にする働きであるといえるであろう。これにより、感覚で受け取られた経験はイメージなどに変換され、記憶に保存されたり夢に用いられたりする。また、心に抱いていられないようなものを β 要素とし、これは意味の欠けている感覚印象であり、欲求不満を起こす感覚でもある。 β 要素は身体と心が区別されていないような生の要素である (Bion, 1977/1999 ; Symington & Symington, 1996/2003)。Bion は β 要素から α 要素への移行を考えたとき、乳児は α 機能が未発達であるため、未加工の耐え難い原始的感觉である β 要素をそのまま母親に投影し、母親は自らの α 機能を用いて投影された β 要素を α 要素、つまり乳児が耐えられる形にして乳児に返す。乳児は母親のそのような動きから、 α 要素に加えて α 機能も取り入れていくことで、 α 機能を発達させていく。ここでいう α 機能とは、適切な形をとることができればそれはシンボルとなり得るともされており (Symington & Symington, 1996/2003)、象徴形成のために必要な力と考えられる。また α 機能は考えることや夢を見ることにつながり、無意識と意識とを分ける壁を作り相互作用を可能にする。これらは心の中でのみなされる作業であるため、心に主体性的感覚をもたらす。これらのことから、Bion は母子関係を基盤として α 機能が獲得され、そしてそこから主体性的感覚や象徴形成が進んでいくと考えていたのではないかと思われる。

Segal (1991/1994) は、象徴について 2 つのものを想定した。表すものと表されるものが別のものとしてではなく、イコールの関係になっている「象徴等式 symbolic equation」と、何かを表すが、表されるものとは異なるものであると認識されている「象徴表象 symbol」である。また、象徴等式を妄想－分裂ポジション、象徴表象を抑うつポジションと関連付けて考えた。象徴形成の力は象徴等式から象徴表象へと発達していくが、直線的ではなく行き来しながら発達していき、健常な大人もまた、両方の象徴を使うことがあるとしている。そして、その高度に発展したものとして言語や芸術が挙げられる。Segal (1991/1994) は、表すものと表されるものが未分化である象徴等式のような具象的思考の背景には、自－他の境界の無さがあるとし、象徴表象への移行に重要となるのが分離や喪失の体験であり、喪の徹底操作の過程で象徴形成が進むとした。分離や喪失は、一緒にあったものが離れていくことや失せることである。象徴等式は理想的な対象の不在を否認したり、迫害的な対象を支配したりするものであり、自－他の境界が曖昧なため対象の喪失は自分の一部の喪失のようにも感じられるであろう。分離や喪失に耐え、離れていくことでそこには自分と対象の間に境界が生まれる。そうした分化により抑うつポジションへの移行が進むと、象徴表象は喪失を克服するために用いられる。つまり、対象の不在を受け入れられるようになるが、それとイコールのものをを用いることで否認す

るのではなく、別のものであることを認めながらも“表すもの”としての象徴表象を用いるようになって考えられる。喪失に耐えようとする動きが正常に働けば、内在化という形で離れていったものを内的対象として持つようになる (Segal, 1991/1994)。ここにもまた、自一他や内界と外界の区切りができることが示されており、このことが象徴表象への移行の中では重要とされている。Bion が母親との関係の中で象徴形成を考えたことに対して、Segal は分離や喪失、そして内的な対象関係の中で象徴形成が進むとしていると考えられるのではないだろうか。

さらに、内界と外界のどちらでもない間の領域である中間領域 *intermediate area* について提唱した Winnicott, D. W. は、移行対象 *transitional object* を早期の象徴性によるものとした。移行対象は毛布をはじめとした乳児が肌身離さず持とうとするもので、乳児にとっては母親でもあるものである。そして、中間領域である「遊ぶこと」において、「外的世界の現象と、個別の人間の現象とを同時にあらわす象徴の使用が発展する」という (Winnicott, 1971/2015)。この中間領域は象徴が扱われる場であると考えられる。また、「対象の使用」が可能になることは象徴が成立することと近いことを論じているとも考えられている。「対象の使用」とは、乳児が対象を攻撃しても現実には生き残ることで使用できるようになる、すなわち対象そのものの自体の特質に応じて自分に貢献させることができるようになるということである (Winnicott, 1971/2015)。乳児は、そこで対象は万能的なコントロールの及ばない外的世界にあるものと気付くことになるが、これは自分と異なる外的世界の存在を知ることでもあるように思われる。乳児は外的世界に開かれていくことで、「私でない実質をフィードバック」される。また外界を知ること、自分の内界に気付くことにもつながるであろう。象徴の成立には、象徴が内界のものを表すものであったとしても、それが外界のものであるという認識もまた必要である。こうした対象の使用が可能になると、対象を外的なものとして知り、そこに主観的な意味合いを込めて用いることもできると考えられる。Winnicott の論では、内的世界と外的世界の分化や、対象を外界のものとして知ることが象徴形成の過程に重要と考えられるのではないだろうか。また、象徴は外的な表すものとしてもあり、内的な表されるものとしてもあり、どちらでもあってどちらでもないという中間領域的な性質を持っているともいえよう。この意味で、内的世界と外的世界の“間”が生じることもまた象徴形成において必要なことと言えるのかもしれない。

4. 分析心理学における象徴形成

Jung, C. G. は、象徴を「比較的知られていない複雑な、存在しているとは経験されているが、意識によってまだ十分には把握されていない事実を記述する、可能な最良の表現」としている (Jung, 1935 ; Gordon, 1978/1989)。そして、Freud の象徴の考え方を抑圧された性に関することを表すための代替物、つまり記号 *sign* にすぎないとしていた¹ (河合, 1967)。例えば、十字架が神の愛と解釈されるならばそれは記号的な説明であり、これまで知られることのなかった神秘的、超越的なものを表しており、これ以外では上手く表現できないものえあるとき、それは象徴であるとした (Jung, 1921)。Jung の論では象徴は汲みつくせない意味をはらんでいる

¹ ここで言う記号 *sign* と象徴 *symbol*, 及びその差異の捉え方は、Jung によるものである。記号と象徴の違いは心理臨床だけではなく哲学の分野でも議論は多岐にわたる。

ものとして無意識の言葉とされる。そして、象徴を受け取る側の人間の象徴的態度 *symbolic attitude* が無ければ、象徴は象徴たりえない。象徴的態度とは、与えられたものをそれ自体としてのみではなく他のものの表現とみなすことができる、言い換えると、「～であるかのような」という性質を見ることのできる意識の態度である。この象徴的態度がなければ、象徴のその内容は幻覚的に行動化されたり、もしくは全くの無駄なものとなってしまったりするとされている (Gordon, 1978/1989)。

Jung (1934/1997) によると、象徴形成は対立物の統一と深く関係しており、象徴は相反するものを統合するものとされている。また、象徴は無意識から自然発生的に生まれ出るという。つまり、象徴が生じる前には相反する2つの傾向が意識され、自我はどちらか一方を抑圧してどちらか一方のみを選ぶのではなく、対立する両者に関わろうとしていく (河合, 1967)。例えば、論理的な考え方をしている人の中に、それまで無視されてきた無意識の中にある感情的な面が働き始めるとき、2つの相反するものが心の中にあることで自我はどちらか一方的に動くことができなくなってしまう、自我を動かしていた心的エネルギーは無意識に退行する。しかし、自我が働きを弱めながらも退行や対立に耐え続けて動いているとき、無意識と自我とが統合された象徴が生じることがあり、それは今までの立場を超えて創造的な意味を持ち、象徴を通して無意識へと退行していた心的エネルギーが再び自我の方へと動き出すこととなる (河合, 1967)。Jung (1921; 1935) は象徴形成によって心が退行から進行へと、無意識から意識へと移行し、乖離されていたものを統合していくという機能を重視し、それを「超越機能 *transcendent function*」と呼んでいる。このように、象徴は別々の対立するものに橋を架けて両者をつなぐ働きがあるとされ、1つのものを超越し、その対立するものをも含み得る。合理と不合理、もしくは分化した心的機能と原初的なレベルなどの対立した両者から生じ、それらの協同を媒介する超越性を持つ。Jung における象徴は意識と無意識、心と体をつなぐものであり、それはある意味、対立や分化を超越して癒すものであるともいえるであろう。Jung は象徴的な夢やイメージは大きな治療力を持つものであるとしており、分析家の仕事の1つは患者の生きた象徴と関わる場をつくり、治療者自身も象徴を共に体験することといえるのではないかと考えられる。

Jung は象徴に橋や癒しといった性質を考え、その意義を論じながら、象徴の生じる場である想像やイメージの重要性についても述べているのではないかと考えられる。ただし、Jung のいう象徴形成とは、対象関係論で論じられてきたような乳児期に発達する象徴形成の力から、それ以上に高次の心的機能が必要とされるようなものまでも含んだ上で述べられているようにも思われる。

5. 「橋渡し」としての象徴

ここまで述べてきた対象関係論を踏まえて Jung 派の立場から象徴に関して論じている Gordon, R. の見解が興味深い。ここからは、これまでの論を踏まえた上で象徴の「橋を架ける」ことに特に着目した Gordon による論を中心に考えていきたい。

Gordon (1978/1989) は、象徴の記号との違いとして、記号は表すものと表されるものが本質的につながりを持つものでない一方、象徴は何らかのつながりがあるとしており、これは前述の一部の哲学の象徴とはやや捉え方が異なっているが、心理臨床学として、慣習の中でつなが

りを学ぶというよりも個人の内的世界とのつながりを持つものとして象徴を捉えているためではないかと思われる²。

象徴形成の発達プロセスとしては、まず感覚、知覚体験、元型的イメージといった本能に近いものがあり、その後 Segal (1991/1994) の象徴等式、象徴表象という流れを考えた。Segal と同様にこのプロセスは直線的ではないとしており、象徴表象を扱うことができるからといって象徴等式や感覚的な要素が消え去るわけではなく、人間はこれらのさまざまな水準の象徴を用いているという (Gordon, 1978/1989)。また、Gordon (1978/1989) は、象徴は意識—無意識、いまこころ一般、心—体、既知—未知、物理的事実—意味といった別々のものや経験の間に橋を渡すものであるということを強調している。そして、橋渡しである象徴形成のプロセスを「生の願望」と「死の願望」という面から論じている。Gordon のいう「生の願望」は独立性や同一性を求める自我のはたらきであり、一方で「死の願望」は全体性や融合的なありかたを求める自己のはたらきである。前者は“個”としての存在を求め、能動的主体的な動きである一方、後者は融合的であり受動的で主体性を持とうとしない動きであると考えられるのではないだろうか。この視点から、Gordon (1978/1989) は発達のプロセスを次のように捉えている。赤ん坊は母親の胎内にいて物理的に母親と一体になっている状態から誕生後もしばらくまで母子一体感の体験が続き、徐々に自分自身の欲求が経験されることで乳児自身と母親が分化し、母親や周囲の注意を求めるようになる。そして、自分自身と周囲の世界、及びその差異に気付いていくにつれて、逆の動きである融合への欲求を募らせる。この融合的な在り方が人間にとって最も安心できる状態であると考えられることも、融合への欲求が生じる 1 つの要因である。そして、この“逆”の動きが生じることで独立を求める力と融合を求める力が分化し、両者が対立した状態で存在することになる。意識と弁別の力が発達し、心的現実の感覚をはっきりと持つようになると、例えば母親のような外的なものそのものの不在による欲求不満にも、母親のイメージを内在化させることにより耐えられるようになるとされている。そして、その内的世界は自分だけのものであるという信頼感のもとで自らの存在の独立性と自律性を確かめる。

このプロセスには常に、分化して“個”となっていく動きと、それを恐れて抵抗し融合を求める動きとの矛盾する方向への動きの両者が存在し、バランスを保ちながら進んでいくと考えられる。そして、独立への動きをつかさどる自我と融合への動きをつかさどる自己といった心的システムが分化し整うと象徴形成の力が発達し、象徴を扱えるということは、個人と世界が分かれ、その間に橋を架けるプロセスが可能になるということである。Gordon (1978/1989) はこの象徴が成立することを「一方で個人的かつ独自なものへの欲求、他方、包み込まれ仲間と一緒に結び付けられていたい気持、対象と事実への欲求と意味と意義への欲求、それらに次々と関わりたく思い、またそう試み得る段階」に達したことを意味するとした。象徴形成による橋渡しは、前述の発達プロセスに共存する矛盾する方向への動きの両者に関わろうとする試み

² Gordon の象徴と記号の差異については、Jung や美術学によるところが大きい。象徴と記号の差異については心理学、哲学、美術学など多岐において論じられているし、捉え方もそれぞれ異なる。Gordon は交通信号を記号とみなしているが、前述の Peirce は、記号の中の 1 つを象徴とみなし、交通信号もまた記号論における三次の象徴 Symbols (恣意的なつながりを持つもの) に分類される。

であると考えられる。また、Gordon (1978/1989) は象徴形成を妨げるものとして、過度の分離不安や分化への欲求を凌駕するほど大きすぎる融合への欲求、そして死や喪失に対する過度の愛着や恐怖などを挙げている。これらは、2 つの矛盾する動きの中でどちらかを恐れ、どちらかが大きすぎるという共存や両者への関わりが不可能になるためではないかと思われる。

Hillman (1967/1990) もまた、象徴に関して「橋」という言葉を持ちいており、夢による自分の内側への橋渡しを考えている。Hillman (1967/1990) は夢を象徴として捉え、それは意識と無意識を結び付け、「逆」であるものを結び合わせるとしている。夢は無意識から渡される橋であり、その橋渡しにより、個人の内側における結びつきが可能となる。自分の内側と交わっていることが、他者と関わる基盤となるとされ、集合的無意識のような深い内部を通して人と人が結びつくこともあり得るという。無意識を経験することで、主観でも客観でもないが両者でもある「意味」の領域が生じるとし、自分自身の内側との橋渡しもまた重要なものであると考えられる。

6. 分かれることとつなぐこと

ここまで述べてきた緒論の中で、象徴において一緒にされる「2 つのもの」である表すものと表されるものは分化されている、つまり別々のものであるという認識が必要であるということは共通して考えられている。そのためには自－他の分化、独立への動きが重要である。しかし、Gordon のいう「融合の希求」という受動的な動きもまた重要なものであると考えられる。

人間は象徴を扱う動物であると考えた哲学者の Cassirer (1995/2010) によると、人間は世界と近づくために世界と隔たるといふ。Cassirer は芸術や言語などを「象徴形式」とし、その機能について考えた。人間が自分とは異なる外側の世界を知り、関わるためには、まずは世界と自分の境界を作ることが必要である。そして、その間に境界を引くのが象徴であるとした (Cassirer, 1995/2010)。さらに、象徴の中に“自”の中の内的世界と、“他”である外的世界の間に架けられる橋のみを見るのでは、象徴形式の意味と価値を完全に理解することは不可能であると考え、むしろ、内的世界と外的世界の両極的対立もまた象徴によって作り出されるものだと考えていたようである。自分という存在と自分の外にある世界との対決が遂行される媒体としての機能が象徴には含まれているのである (Cassirer, 1995/2010)。精神分析や心理臨床学の範囲の論ではないが、Cassirer の論の中でもまた、象徴は自－他を繋ぐものであると同時に、分け隔てるものでもあるとされている。これらのことから、発達プロセスの中で象徴を扱い始めることで、自－他の対立や境界がよりはっきりとしてくるという可能性もあるのではないかと思われる。Segal (1991/1994) も Gordon (1978/1989) も、象徴形成の発達プロセスは時に退行することもありながら進んでいくとしており、その中で自他の分化も徐々に明確になってくるのではないかと思われる。すなわち、はっきりとした分化があってから象徴形成が生じるというような直線的な動きではなく、分化と象徴形成は同時生成的なものであるのではないかと考えられる。そもそも、人間の発達には直線的なものではないというのはさまざまな見地から述べられていることのように思われる。Gordon (1978/1989) は、人間には独立の欲求と融合の欲求とが共存し得ることを指摘しており、分化の過程でも逆の動きとも捉えることのできる融合への希求というものがつきものであると考えられる。

現代における診断として、象徴形成の難しさのある発達障害については、たびたび主体のなさがその特徴として挙げられる。それ故に、自－他の境界がなく、ここまで論じてきた分化がほとんど生じていないと考えられる。河合（2010）は、このような発達障害の心理療法に関して、Jung の「結合と分離の結合」という見方を用い、分離によって関係が生じるという逆説的な動きがあり、そこから主体が立ち現れるとし、結合と分離は同時的で弁証法的なものであるということを指摘している。Jung のいう「結合」において結びつくのは互いに対立するものや性質と考えられ、そのため結合の前提として対立する二物が存在する（Jung, 1955/1995）。しかし、この概念は単純に対立するものが結合するということだけではなく、そこには結びつくことが不可能であるという面が存在しており、分離が含まれている（河合, 2010）。この分離と結合の弁証法的な在り方が発達障害の心理療法の事例を通して述べられており、融合があつて次に分離があるという流れは確かにあるものの、これは漸進的、継時的なものであるというよりも、不在によって存在に気付くような否定から何かが生じることや、何かとの分離が何か別のものとの結合になっているように同時に生じることもあり得、弁証法的なものとも捉えられらるとしている。そしてその中で主体が徐々に形成され、象徴も成立するようになるという（河合, 2010）。つまり、単純に融合や混沌の中から分離へと進むわけではなく、分かれることと結びつくことは同時に起こり得るし、相互に関わり合いながら進んでいくものだと考えられる。これらのことから、分化のプロセスの中には、なお融合を求め続けるという矛盾が含まれていると考えられる。外界との境界が生じ分離することで主体が確かなものとなってくると同時に、それゆえそれまでの混沌とした融合的な在り方ではいられないがやはりそれ求める面として、融合とは異なる形でつながらうとすることが象徴形成の1つの要素なのではないだろうか。

分化や世界との境界として象徴形成がある一方、逆説的ではあるが分化とは逆の方向へ向かうとする動きによるところもあると考えられ、象徴形成の発達プロセスは独立を求める動きと融合を求める動きの間に境目を作った上でつなぎ、共存可能にすることでもあるのではないだろうか。この点で、「2つのものを一緒に投げる」という象徴の語源に近い意味が感じられるように思われる。何度も述べていることではあるが、象徴は結びつけるものであると同時に境目でもある。境目を経験することで、境目の両側にあるものの異質性や個別性も強調されてくる、つまり分化がある程度生じることで象徴形成も生じるが、象徴形成の中でその分化のプロセスもより進んでいくと考えることもできるだろう。象徴が成立し、象徴を用いて世界と関わり始めることで、内的世界と外的世界が異なるということをさらに体験していくことが可能になるのではないだろうか。そうすると、象徴は内－外、自－他、独立－融合といった対立するものから生じる一方で、同時にその二者をより曖昧な状態からはっきりとした別のものに作り上げる働きもあるとは考えられないだろうか。象徴は対となる二物から生じ、同時にその物を作るものでもある第三項という³捉え方もできるのではないかと思われる。主体感を持つことと象徴形成が関わるということは、本論の初めに述べたことである。主体感を持つための自－

³第三項に関してもさまざまな捉え方があるが、Ogden (1994/1996) の分析の第三主体という考え方は第三のものは患者と分析家によって創られるが、同時に患者と分析家を創り出すものでもあるとした。また、Jung (1938/1989) は、対となる「二」から「一」が生じるとし、「第三なるものにおいて緊張は解消し、失われていた一なるものが再び現れる」とした。

他分化が象徴形成の基盤にある一方で、象徴はそれらを対にあるものとした上でつなぐという動きを持つことから、自－他の独立性を強める働きもあるという点で、主体の生成と象徴形成もまた、継時的なものというよりも弁証法的なものでないかと考えられる。さらに、そこには独立への動きだけではなく融合の動きも含まれており、さまざまな逆説をはらんだものと考えられるのではないだろうか。

7. 象徴形成のプロセスと主体の生成

独立への動きと融合への動きの両者によって象徴形成が進み、その象徴形成により対となる二物が別個のものとして橋が渡され、その二物もまた象徴によってはっきりとしてくるという観点から、今一度これまでの諸理論、特に対象関係論における象徴形成について考えてみたい。Bion (1977/1999) は融合的な母子関係の中で象徴形成の基礎となる α 機能が育まれ、それと同時に二者の分化も生じるという。また、Segal (1991/1994) はある種の喪失といえる分離が生じることが象徴形成において重要とし、Winnicott (1971/2015) は脱錯覚に伴う内外の分化とその間の中間領域が展開していくことが象徴形成に関連しているという。Segal は象徴の働きの 1 つとして「伝達機能」を考えるなど、象徴においてつながることという視点もあるが、やはりその形成プロセスとしては分化を強調する視点が大きいように感じられる。ここでは、それに加えて橋渡しや融合への動きといった繋ぐものとしての要素や、主体の生成との弁証法的な関係を中心に 5~6 節で述べてきた視点から、Segal (1991/1994) の事例を見返してみたい。

Segal (1991/1994) が象徴等式から象徴表象への移行が見られるものとして、Geissman (1990) の事例を取りあげている。これは、精神病的とされる 8 歳の女の子の事例である。この女の子は言葉を発したり理解したりすることがほとんどできず、壊すことや攻撃することが活動のほとんどであった。また、小石やビー玉を人や物に当て、失くすと混乱するというような異様な執着を示していた。分析の中でも、ビー玉を口に入れたり吐き出したりする。分析空間にある鎖が金属球の繋がりと気づき、それを口に入れて吐き出す。ここで初めて女の子は分析空間の物と関わるが、金属球やビー玉は母親とイコールの関係であり、ビー玉を飲み込むことは母親を飲み込むことであった。分析を続けていく中で、女の子は分析家に大きな灰色のビー玉の絵を描いてほしいと頼む。これは分析の中では、彼女の初めての複雑な文章であったという。そして、絵と自分の口から吐き出すビー玉を見比べ、ビー玉が母親ではなくビー玉として捉えはじめられていく。しかし、その後は具象的思考に退行して絵を濡らして口に入れたり、絵を置いていくことができないという未分化さも窺われる。そういった退行を見せながらも徐々にビー玉に類似した対象に興味を持つようになり、風船を割って欠片を集めて全体の絵を描いてほしいと分析家に頼む。ここに見られるのは、象徴的な次元での統合な動きである。数年後、女の子は言語的なやりとりが可能となり、分析家とビー玉を使ったゲームで遊ぶようになる。

Segal (1991/1994) は、この事例を象徴等式から象徴表象へと具象的なものに立ち戻りながら移行していくプロセス、言い換えると精神病的な在り方から抑うつポジションへの移行として取り上げている。患児にとってビー玉と母親は分化されておらず、言葉が出ない、遊べないなど混沌とした自他未分化な状態であったと考えられる。しかし、分析を通してビー玉を絵にして対象化しようとする動きが生じ始め、少しずつビー玉を母親ではなくビー玉として捉え始

めるようになる。また絵はビー玉を表すもので、イコールの関係ではなくなっている。さらに、このタイミングで最初の複雑な文が出てきたことも興味深い。言語は象徴形成の高度に発展したものである (Segal, 1991/1994)。そして、この発話は「描いてほしい」という自分の欲求を相手に発信する動きであり、自分の内界が存在して、それを頼む相手が生じている。単なる自他の分化だけでなく、自分の中で生じてくる欲求を言葉にする、つまり外側に投げかけるという、主体性が立ち上がり相手に関わろうとする動きが生じた瞬間とも考えられるのではないだろうか。二者をつなぐ「橋」として言語が機能し、その両端には2人の別の人間が存在している。しかし、分化の動きが生じ始めると具象的なものに立ち戻ろうとするのは、分化への抵抗、すなわち融合への希求の高まりとも思われる。Segal の論の中では退行という言葉が使われているが、独立性を求める動きが高まると同時に融合を求める逆の動きも高まることによるものとも考えられるのではないだろうか。この2つの方向への動きにより象徴が生じると論じてきたが、ここでは分化も未熟な状態であり、まだ別個のものとしてつなげるという象徴にはならず退行という形になったのかもしれない。また、絵が絵として残るようになってからも置いて帰ることが出来ず、やはり自分と絵の境界が曖昧のような感覚が残っており、絵を置いて帰ること、つまり絵を喪失することは自分自身の一部を喪失することのように感じられたのではないだろうか。

しかし分析を重ねるうちに、最終的に分析の中でビー玉はビー玉として扱われるようになる。そして分離に耐えられるようになる。それまで混然一体となっていたビー玉と母親が分化するとともに、風船遊びでは部分から全体への統合が図られている。象徴について、Gordon (1978/1989) や Hillman (1967/1990) は個人の中にある意識と無意識を橋渡しするものとし、Segal (1991/1994) は自身の内界との伝達機能であるとしている。象徴形成のプロセスでは、内的世界と外的世界が分かれて橋が渡されるとともに、事例中の風船のように、外界とは隔てられた内的世界の中での統合も図られるのではないかと考えられる。象徴形成が進む中では、主体のないような状態、もしくは主体がほとんど未分化でぼんやりとした、もしくは断片的な状態から、単に外界と切り離されたものとして主体が生じるだけではなく、少しずつ内側にあるものも分化していきそれらがつながり、まとまりをもった統合体である“個”となった自分を作っていくという動きも生じているのではないだろうか。しかしここでもまた、象徴形成により“個”が作られるだとか、“個”が生じることで象徴形成が進むだとか因果的、あるいは継続的な関係で生じているのではなく、同時的な動きとして生じていると考えられる。

8. 心理臨床における象徴の意義

ここまで述べてきたことから、象徴はどのようなものとして存在し得ると考えられるのであろうか。これまでの心理臨床学では、象徴についての考察は統合失調症との関連付けで考えられることが多く、Segal (1991/1994) の具象的思考のように、本来別の表すものと表されるものが混同されることや、想像や表現の難しさが論じられている (中井, 1984)。一方、現在は発達障害を持つクライアントに象徴形成の難しさがみられることについて指摘されることも多く、玩具を並べるなど意味や物語性のあるものとしての理解が難しい遊びが行われることや、比喩や象徴的意味を持ちにくい、所謂字義通りの言葉を用いることもある (河合, 2010; 伊藤, 2001)。

象徴形成は自他の分化や主体の生成との関わりがあると示唆され、時代によって焦点が当てられる病理や観点は異なるが、そういった課題との関連で考えられることも多いのかもしれない。ただし、象徴に関して上記の異なる病理からの視点があるということは確かであるが、それらを複合して考えることについては危険性をはらんでいることは考慮に入れなければならない。

象徴とは二項の対の中から生じるものであり、その二項を含む、つなげるようなものでもある。だからこそ、二者という対の存在する空間である心理臨床の場で生じてくるのではないかと考えられる。そして、その対となる二項を結び付ける橋でありながら、その両端にあるものの形成や対立にも関わるという点で、象徴は心理臨床における二者をつなぎ、その個人の中の意識と無意識をつなぎ内的な統合に貢献するものとなり得ると考えられる。また、同時に“個”としての主体、そしてそれと向かい合う相手を創り出す。言い換えると、両端を結び付けるものであると同時に分かちものであり、さらにその両端を形成する橋でもあると考えられるのではないだろうか。自由でありながらも守られた二者だけの空間であるとともに「枠」としてさまざまなところに区切りや境界がある心理療法の構造には、融合的にもなり得、対が生じることもあり得、そこから象徴形成が生じていくという可能性が秘められているのではないかと思われる。さらに、象徴が成立することで、二者の間に共有可能なものが生じることとなり、関係性を結んでいくことができるようになるのではないかと思われる。これらのことから、象徴形成、主体の生成、他者の生成はそれぞれがそれぞれと関わり合いながら、同時的、弁証法的に進んでいくのではないかと考えられる。

9. おわりに

本論では、象徴形成のプロセスを分化や融合への希求と絡めながら考え、自分や他者の生成との弁証法的な関係を考察してきた。象徴の定義や捉え方、また象徴形成のプロセスは心理臨床の中でも捉え方には多様性があると考えられ、本論はその一部にしかすぎない。しかし、語源である「2つのものを一緒に投げる」という意味はどこにも通ずるものがあるかもしれない。本論で扱うことのできなかった理論も含め、また別の観点から考えていくことでさらなる示唆が得られるのではないかと考えられる。統合失調症、発達障害といった異なる病理で象徴形成についての難しさが見られることについては興味深い点ではあるが、それぞれの病理は異なるものであると考えられる。本論は理論のレビューという色合いが濃く、今後は実際の臨床場面での象徴形成についてさまざまな事例から検討していくことも必要であると思われる。

文献

- Bion, W. (1977). *Seven Servants*. New York: Jason Aronson, Inc. (ビオン, W. 福本修 (訳) (1999). 精神分析の方法 I—セヴン・サーヴァンツ. 岩崎学術出版社)
- Cassirer, E. (1995). *Zur Metaphysik der symbolischen Formen*. Hamburg : Felix Meiner Verlag. (カッシーラー, E. 笠原賢介・森淑仁 (訳) (2010). 象徴形式の形而上学 カッシーラー遺稿集 第1巻. 法政大学出版局.)
- Freud, S. (1900). *The Interpretation of Dreams. Standard Edition Vol.4*. London: Hogarth Press. (フロイト, S. 高橋義孝 (訳) (1968). フロイト著作集 2 夢判断. 人文書院.)

- Geissman, C. (1990). 'L' Enfant aux billes : essais sur la communication chez un enfant autiste'. *Journal de Psychanalyse de l'Enfant*, 8.
- Gordon, R. (1978). *Dying and Creating: A Search for Meaning*. London: Karnac Books. (ゴードン, R. 氏原寛(訳) (1989). 死と創造. 創元社.)
- Hartshorne, C. & Weiss, P. (Eds) (1978). *Collected Papers of Chares Sanders Peirce, Vol2*. Cambridge: Harvard University Press.
- Hillman, J. (1967). *Insearch: Psychology and Religion*. New York: Scribner. (ヒルマン, J. 樋口和彦・武田憲道 (訳) (1990). 内的世界への探求—心理学と宗教. 創元社.)
- 伊藤良子 (2001). 心理治療と転移—発話者としての〈私〉の生成の場. 誠信書房.
- Jones, E. (1916). *The theory of symbolism*. London: Bailliere, Tindall & Cox.
- Jung, C. G. (1921). *Psychological Types*. London: Routledge & Kegan Pail.
- Jung, C. G. (1934). The Development of Personality. In Anthony, S. (Ed) (1983). *The Essential Jung*. (ユング, C. G.(著) アンソニー.S.(編). 山中康裕(監修). (1997) エssenシャルユング. 創元社.)
- Jung, C. G. (1935). The Transcendent function. In Adler, G. & R. F.C. Hull, R. F. C. (Ed), *The Structure and Dynamics of the Psyche*, 67-69. Princeton: Princeton University Press.
- Jung, C. G. (1938). *Psychology and Religion*. New Haven and London: Yale University Press. (ユング, C. G. 村木詔司 (訳) (1989). 心理学と宗教. 人文書院.)
- Jung, C. G. (1955). *Mysterium Coniunctionis*. Zürich: Rascher. (ユング, C. G. 池田紘一 (訳) (1995). 結合の神秘 I. 人文書院.)
- 河合隼雄 (1967). ユング心理学入門. 培風館.
- 河合俊雄 (2010). 発達障害への心理療法的アプローチ. 創元社.
- Klein, M. (1975). *Love, Guilt and Reparation and Other Works*. London: Hogarth Press. (クライン, M. 西園昌久・牛島定信 (編訳) (1983). 子どもの心的発達. 誠信書房.)
- 中井久夫 (1984). 分裂病. 岩崎学術出版社.
- Ogden, T. H. (1994). *The Matrix of the Mind, object relations and the psychoanalytic dialogue*. UK: Jason Aronson Inc. (オグデン, T.H. 狩野力八郎 (監訳) (1996). こころのマトリックス 対象関係論との対話. 岩崎学術出版社.)
- Segal, H. (1991). *Dream, Phantasy, and Art*. London: Tavistock Routledge. (シーガル, H. 新宮一成 (監訳) (1994). 夢・幻想・芸術—象徴作用の精神分析理論. 金剛出版.)
- Symington, J. & Symington, N. (1996). *The Clinical Thinking of Bion*. London: Routledge. (シミントン, J. & シミントン, N. 森茂起 (訳) (2003). ビオン臨床入門. 金剛出版.)
- 氏原寛・亀口憲治・成田善弘・東山紘久・山中康弘 (共編) (2004). 心理臨床大辞典. 培風館.
- 米盛裕二 (1981). パースの記号学. 勁草書房.
- Winnicott, D.W. (1971). *Playing and Reality*. London: Tavistock Publications. (ウィニコット, D. W. 橋本雅雄・大矢泰士 (訳) (2015). 改訳 遊ぶことと現実. 岩崎学術出版社.)

心理臨床学における象徴の概念とその機能について

—象徴形成のプロセスに着目して—

大場 有希子

心理臨床において、象徴はかねてからクライアントの理解のために重視されてきただけでなく、象徴形成が難しい者にとって象徴が生じること自体が大きな意味を持つとされてきた。本論では、心理臨床学における象徴に関して、特に象徴形成のプロセスを中心に文献的考察を行った。象徴形成の基盤としては、融合的状態から分化が進むことが緒論により述べられてきた。しかし、象徴は別個のものである自—他をつなげる「橋」としての機能を持ち、分化とは逆の動きである融合への希求が存在し続けることも関わっていると考えられる。また、象徴形成は対となる二物から生じていると同時に、その両者を形成しているとも考えられる。さらに外界へ向けてだけではなく、内界との橋渡しでもあり、内的なまとまりをもった主体を作ることにとも関わると思われる。このような象徴形成と主体の生成は、継時的、因果的というよりも、同時的、弁証法的に生じるものと考えられる。

A Study on the Concept and Function of Symbol in a Psychological Point of View: Focusing on the Process of Symbol Formation

OBA Yukiko

Symbols have been important to understand a client in psychotherapy, and it is meaningful that symbols appear in psychotherapy for people who have difficulty for symbol formation. This paper discusses symbols and the process of symbol formation with reference to some theories. It has been said separation of the internal world and the external world or self and others plays an important role in symbol formation. In addition, a symbol is a bridge between “self” and “others”, and not only separation but also the motion for fusion involves symbolization paradoxically. Symbol formation arises from “opposition,” while the two opposing concepts are paradoxically formed by the symbol. In addition, symbol formation makes it possible to communicate with the internal world, and therefore it is involved in establishing subjectivity and the inner world with unity. Generation of subjectivity and symbol formation are considered to occur not in turn or causally but dialectically and simultaneously.

キーワード： 象徴形成、橋渡し、主体の生成、弁証法

Keywords: Symbol formation, Bridging, generation of subjectivity, dialectical